

「めぬまカップ」は本庄第一高等学校の日野聡先生が提案・創設された親睦イベントで今年で第 20 回を数える。大会運営は関東学園大学と尚美学園大学の選手達が担当し、武蔵丘短期大学の選手達も審判補助の仕事に当たった。U-20 女子 W 杯で活躍した、元ヤングなでしこの中村ゆしか選手が 3 回も副審を務める光景は日本の女子サッカー独特の現象であろう。女子サッカー選手にとって「一年の始まり」とも表現できる第 20 回めぬまカップは 3 月 25 日に開会式が行われ、26 日から 29 日の 4 日間、48 の高校の女子サッカー部がしのぎを削った。この記事では埼玉県勢に焦点を絞りたい。埼玉県勢の第 20 回めぬまカップでの順位は総じて低い。第 20 回めぬまカップの埼玉県勢の最終結果は本庄第一高等学校が 48 校中 14 位、県立入間向陽高等学校が 18 位、県立久喜高等学校が 22 位、花咲徳栄高等学校が 31 位、埼玉栄高等学校が 43 位、県立熊谷女子高等学校が 47 位であった。

日野先生はこんなコメントを残して下さった。「ここ 1、2 年は全日本高校女子サッカー選手権大会で本庄第一と久喜が初戦で大敗しているが、これまでの長い間本庄第一高等学校や埼玉平成高等学校など埼玉県勢が日本の高校女子サッカーを牽引してきた。」2012 年度のなでしこリーグの空前の観客増加も女子 W 杯優勝から起因した一過性のブームと捉えることは間違いである。日野先生を含む先人達の絶え間ない地道な努力があったからこそ花を咲かせたのである。日野先生はその高校生たちの将来を踏まえ、こうも仰っている。「将来、日本代表に選出される力が無いのになでしこリーグのクラブに入って、2、3 年でつぶれたらどうするんだ？高卒ルーキーは本庄第一としては論外。」筆者も、大学 4 年間の技術的にも精神的にも成熟できる貴重な時間を鑑みると、学士号は女子サッカー選手にとって必須のアイテムだという意見に同感である。

以下は埼玉県勢についての花咲徳栄高等学校の末貴光先生のコメントである。「埼玉県には 34 の女子サッカー部を持つ高校があるが、優秀なタレントを持つ中学生の女子サッカー選手が存在しても、東京都や地方の資金力のある高校に持って行かれてしまう。」と埼玉県の高校勢の現状に憂いていた。個人的な意見だが、もっと女子プレーヤーを惹きつける魅力あるサッカー環境作りを進めることが今後の埼玉県勢の課題であろう。埼玉県には関東大学女子サッカーリーグ 1 部に属する大学は 4 つ(武蔵丘短期大学、尚美学園大学、東京国際大学、大東文化大学)も存在するのだから、大学レベルと高校レベルの交流を活発化し、高校勢と大学勢との隔たりをより小さなものにする努力が現状を改善する一歩になるのではないかと。特に武蔵丘短期大学の女子サッカー部シエンシアの監督でおられる河合一武先生は日本におけるポゼッション志向サッカーの第一人者である。武蔵丘短期大学シエンシアのポゼッション志向サッカーから学べるものはたく

さんあるはずだ。しかも昨年は埼玉県勢として武蔵丘短期大学が、今年は東京国際大学がインカレ・ベスト 4 進出という快挙を成し遂げている。しかし、残念ながら埼玉県の高校出身者が埼玉の強豪大学に在籍している事例が非常に少ないのが現実である。言い換えれば、埼玉の高校には良いプレーヤーが集まらないが埼玉の大学には良い選手が集まっているのである。

この大会では 1 位トーナメントの本庄第一高等学校 vs. 成立学園高等学校の試合を偶然、チャレンジリーグ所属のクラブでバニーズ京都 SC の選手と一緒に取材観戦した。その時に「埼玉県勢の高校生の足元の技術が本当にうまくなっている。」とのコメントを頂いた。筆者は埼玉県に位置する高校の限られた予算についてこの記事の中で論ずるつもりは毛頭ない。すぐに実行できることから始めよう。そこで埼玉県の高校女子サッカー界に、確かな足元の技術を基本とした、より完成度の高い「ポゼッション志向サッカー」を勧めたい。第 20 回めぬまカップの決勝進出の日ノ本学園高等学校と常盤木学園高等学校のサッカーを観戦して、筆者はその確信を強めた。姫路獨協大学の藤谷智則先生が埼玉県的女子サッカー選手たちへポゼッション志向サッカーやチーム全体の運動性に関するメッセージを送って下さった。「劣勢に立った時や試合の入りが悪かった時、単調な攻撃のリズムを変えることが重要になる。そういった時に役立つことは個々のプレーヤーのスキルのみならず、学年の上下などタテの関係を壊してピッチ内外の普段の意思疎通をスムーズにしておくことが大切。チーム全体の運動性や連係も円滑なコミュニケーションから生まれるのだから。」

今年の U-17 女子 W 杯にてベスト 4 に進出した代表国は日本、ベネズエラ、スペイン、イタリアである。一般的に言って、これらの国々の代表チームは集団主義的で個人主義の国々のフィジカルゴリ押的なサッカーの代表チームより体格は恵まれなくとも足元の技術と運動性に長けている。ベスト 8 止まりのカナダ、グループリーグ敗退のドイツ、本大会に参加できなかったアメリカやアフリカ勢は高い身体能力を誇るが、3 人目の動きを意識するといった運動性や連係に欠けているケースが多々ある。以上の理由から、普段の練習から向上心を持って、より完成度の高いポゼッション志向サッカーを追求して欲しい。それが筆者の埼玉の高校に所属する女子サッカー選手への提言である。U-17 女子 W 杯を明後日に控え、高い技術とポゼッション率を誇る、高校生が主力の「リトルなでしこ」の優勝を心待ちにしている筆者である。

梅津 大 (ウメヅ ヒロシ)